

学会ニュース

目次

・第27回大会について	1
・都市という問題群 佐々木 健一	1
・17世紀と18世紀—連続と不連続 塩川 徹也	3
・事務局より

6

第27回大会について

今年度の大会は、来る6月11日（土）、12日（日）に、日本大学文理学部（東京都世田谷区）で開かれます。開催校責任者は、佐々木健一代表幹事です。詳細は同封いたしました大会プログラムをご覧ください。6名の会員が自由論題で発表され、共通論題「近代都市の胎動」では4名の方がご報告くださいます。2年ぶりの東京での開催ですので、多数の皆様ご参加をお待ちしております。

都市という問題群

佐々木 健一

今年の全国大会において《近代都市の胎動》というテーマで共通論題のセッションをコーディネートするにあたり、都市というテーマについての私感をつづることにする。

わたくし自身は都市の研究者であるなどとは言えない。ただ、専門とする美学の立場から、都市景観の美には強い関心があるし、日本文化を考える際に、この問題は本質的な意味をもつものと考えている。このような問題意識に到る発端は、専任の教員として最初に奉職した埼玉大学教養学部で得た、或る知見に遡る。適当な語が見当たらないので「知見」と書いたが、衝撃的な啓示と言うべきものだった。五〇人足らずの小さな学部ではあったが、若手を中心とする活気があった。その若手のなかから、定年を迎えられた先生方に学問的な話をして頂き、それを伺おうという声があがり、早速実行に移された。わたくしに都市と日本文化の問題への目を開いて下さったのは、東洋史の矢沢俊彦先生だった。

矢沢先生は中国史の御専門で、たしかイエズス会による伝道の歴史に特別の関心を寄せておられたように記憶する。全国の国分寺跡の散策を趣味とされ、これについてのエッセイ集を編まれ、われわれもその一本の恵贈に与った。その定年時のお話を伺ったのは、ほんの十数人ほどであったろう。お世辞にも盛会とは言えないが、先生のお話からわたくしは深く持続的な影響を受けた。その主題は、中国文化が日本の文化と如何に異なるか、ということだった。その後も、中国研究の専門家たちから、このような感想を聞くことは珍

しくないから、中国文化について研究を深められた方々が、よくもたれる洞察なのであろう。矢沢先生のお話は、日本人が畳に坐って座卓で本を読んだり、書き物をしたり、更には食事をするし、その畳に布団を敷いて寝るのに対して、中国人は椅子とテーブル、そして寝台の生活をする、ということから始まって、家屋の構造と家族構成、歴史、都市の構造に及んだと記憶している。これらに関して、中国の文化は日本よりも西洋の文化に似ているところが多いという趣旨のそのお話は、どれも実証的で、納得のいくことばかりだったが、細部の記憶は、ごく曖昧である。

フランス留学から帰ったばかりで、西洋の文化にしか関心のなかったわたくしは、中国について、漠たる《常識的な》理解しかもっていなかった。すなわち、日本は漢字文化圏に属し、中学から仏教と儒教を学んだだけでなく、絵画も音楽も、そしてお茶も中国伝来のもので、特に西洋と向かい合うとき、日本と中国は同質のグループを構成している、という考えである。折々批判的にやり玉に挙げられる岡倉天心の《東洋はひとつ》は、仏教のルーツをたどってインドへと関心の視野を広げているが、その仏教を日本人はほとんど漢訳の仏典で学んできた。そこで、例えば大西克礼が《東洋的藝術精神》と言うときの「東洋」には、日本と中国の文化的伝統だけが含まれている。このような先達の理解を自然に受け継いだのが、わたくしが中国と日本の文化的な一体性について懐いていた常識的な理解の背景である。矢沢先生の実証的な話に納得する、ということは、この自明のこととして受け入れていた思い込みを否定することでもあった。ドクサとも、或いはイデオロギーとも呼ぶべきこの種の《常識》を批判することの大切さを、更めて教えられた経験でもあった。

都市の問題がわたくしのなかで結晶してくるには、更に二十年近い時間が必要だった。或る国際学会において文化的偏差が主題とされたとき、日本文化の特性を「反都市的」として捉えることを考えた。もちろん、西洋や中国の都市を「都市的」な典型と見なして、日本文化を「反都市的」と考えたのである。城壁で囲まれた前者は、自然と文化を画然と対比する。西洋の近世には、都市のなかの一軒一軒の建物を画き込んだ絵画的な地図がある。隅から隅まで、都市空間を建物が埋めつくしている。実現された唯一の《理想都市》パルマノーヴァの最初期の地図を見ていて、わたくしはそれが現実を画いたものではない、ということに気づいた。17世紀頃のパリの地図でも同様であるに相違ない。このことは、西洋人たちの都市観を如実に示している。都市とは、人間の建造物によって、つまり言い換えれば文化によって、満たされた空間でなければならない。いまはまだ空き地が目立つにしても、いずれそこにも建物が建ち並ぶ、都市とはそういうものだ、という考えであり、これを敷衍するならば、自然を城壁の外に置き、城壁の内部を文化の自立的空間とする二元論である。

中国の都市（長安）をモデルとして造られた日本の古代都市には、どれも城壁がなかった。外部からの襲撃の恐れがなかった、という事情はあろう。同時にそれは、自然との関係に関する思想を反映するとともに、その思想を強化したはずである。都市を囲むはずの外壁がない代わりに、大貴族の邸宅は高い塀で囲まれ、中世の内乱のときには城砦の役割を果たしたほどだった。その塀（西洋語では、塀と垣根、塀と壁の区別が曖昧である。つまりその独自性が認知されていない）の内部には、自然がふんだんに取り込まれていた。このような構造は、現代の小さな敷地の戸建て住宅にまで続いている。ここには、二元論の人為を嫌う文化がある。

日本文化を考える際に、都市が重要な意味をもつ、という私見の概略はこのようなものである。もうひとつ挙げておいた都市景観に対する関心は、まったく異なる背景に由来するが、藝術作品との対比が大きな部分を占めていることは間違いない。西洋人ならば、《作る》という観点に立って、藝術作品をモデルとしてこれを捉えるのではなからうか。少なくともわたくしは、観賞する立場から、自然景観をモデルとして都市景観を考える。しかし、そのとき却って都市がひとによって造られるものであることが浮き彫りになる。計画的な意思なしに造られた町が美しくなる可能性はほとんどない。一人ひとりが好きなように建物を建てた結果の町並みが日本の現代都市の様相だが、それは、あたかも大勢が勝手に自分の主張を言い合っているような喧騒に似ている。都市は、公共性に関する住民の意識を反映する。当然ながら、その景観にはモラルが浸透している。

以上が、都市に寄せるわたくし個人の関心のおおよそを素描したものである。それは、御覧のように、学問的な研究とは言えない思弁である。そこで、専門的な研究者の方々から都市についてお教えを乞う、というのが、今回の共通論題《近代都市の胎動》の（わたくしにとっての）趣旨である。タイトルの意味は、西洋や中国の都市が、やがて空間的な拡張のために城壁を破壊し、上記のような古典的なすがたを喪うが、18世紀はその直前の時代にあたる、ということを示しているだけである。この変化の相に焦点を当てて、パネリストの方々にお話し頂くようお願いしているわけでもない。内容に即して言えば、《18世紀における諸都市の諸相》というようなことになろうか。コーディネイターとして、パネリストの方々をお願いしたのは、幾つかの共通のトピックスについて（沿革、都市のプランに計画性があるかどうか、あるとしたら計画の主体は特定できるのか、そのプランのモデルは存在するか、都市史のなかでの18世紀、18世紀におけるそのサイズ、基本的な性格—日本風に言えば、城下町、門前町、宿場町等々といった—、統治の形態、他の都市や近隣との依存関係）ごく簡略にふれたうえで、それぞれの方が最も関心をもっておいでの問題に主題を絞ってお話し頂くことである。取り上げる都市は、日本、西欧、東欧、東南アジアと多様性を持たせているから、この主題設定とともに、都市という問題のさまざまな可能性に触れることができるはずである。もとより、何らかの結論を求めるようなつもりはない。当日フロアに集われる会員のみならず、この万華鏡をのぞき込み、知的な刺戟を味わいたいと思う。

17世紀と18世紀—連続と不連続

塩川 徹也（東京大学）

日本18世紀学会には、たしか創立後ほどなく入会させていただいた覚えがある。その意味では古株なのかもしれないが、私の本拠が17世紀フランスの文学・思想ということもあって、何かまぶしいお隣を眺めるような心地で、細々とお付き合いを続けてきた。もしかしたらフランスに特有の事柄なのかもしれないが、17世紀の側から見た18世紀研究は、開放的で百花斉放、研究者同士の接触と交流が盛んで、風通しがよく見える。文学—コルネイユ、モリエール、ラシーヌの三幅対—であれ、哲学・思想—デカルト、パスカル、マルブランシュ—であれ、独立した巨人たちが支配するように見える17世紀は、古典主義の牙城としてフランス人の誇りであるだけに、国粹主義的傾向を免れることが困難であり、またそれぞれの大作家・大思想家の個別研究に精力が注がれるあまり、対象を異にする研究者同士の交流がおろそかになるきらいがないとは言えない。それに対して、ヴォルテール、ルソー、ディドロの誰から出発しようとも、その全員に等しい関心を寄せ、同程度の学識を備えない18世紀研究者は考えられないだろう。またフランスの文学史や思想史が、彼らを自国の偉人として賞揚するのは間違っていないにしても、彼らの活動と業績を、ジュネーヴ、ヴェネチア、ナポリ、ベルリン、サンクト・ペテルスブルグ、アムステルダム、ロンドン、エディンバラなどのヨーロッパの諸都市とそこで営まれていた文化活動から切り離して考察することはできない。18世紀研究は否応なしに国際性と学際性を帯びている。それが17世紀研究者には、少しばかり羨ましい。羨ましいといえ、フランス語の読解という点では、18世紀のテキストは17世紀のテキストより、かなり読みやすい。17世紀の文章の解説にはるかに多くの時間をかけてきた人間がこんなことを書くのは、自分の無能を曝けだすようなものだが、18世紀の文章には、その立場や傾向がいかなるものであれ、17世紀のものよりも親近感を覚える。昔、初めてヴォルテールの『哲学書簡』をフランス語で読んだとき、それまで読んでいたデカルトやマルブランシュと比べて、あまりにも分かりやすく身近に感じられたのに驚いた。そして高校で習った西洋史や倫理社会の大本がここにあると思いが当たった。要するに、啓蒙思想は戦後の日本の教育とつながっているが、

17世紀の哲学と思想は、別世界だということである。

とはいえ、17世紀と18世紀は、ルネサンスと大革命の間であって、アンシャン・レジームの核をなしているという意味では、連続した一まとまりと捉えることもできる。二つの世紀の間の連続と不連続は、国や地域によっても、考察の領域によっても、あるいは学問の分野によっても区々であり、定まった答えがないのは当然であるが、この種の問題を考える上で、言葉、それも基本的語彙の変遷の考察が一つのヒントを与えてくれることは、否定できないだろう。じっさい、18世紀フランスにおいて、人間の精神機能そして精神活動とその所産を指示する語彙に生じたいくつかの変化は、17世紀と連続する知的岩盤、ミシェル・フーコー風の言い方をすれば、古典主義時代のエピステーメーに走った亀裂、来るべき地殻変動を予感させる亀裂を示唆しているように思われる。いい加減な見通しに過ぎないが、いくつかの例を見てみたい。

よく知られている例から始めれば、「civilisation」という語が、「文明化」あるいは「社会と文化の歴史的進展」の意味でフランス語に登場したのは、1760年前後であると言われる。理性の光による人間と社会の進歩を信じた啓蒙の時代にふさわしい単語の登場であるが、それなら、それ以前には、同じ事態と観念を表示する言葉はあったのだろうか。このように考えて思い出すのは、ルソーが1750年に発表した第一論文の題名 *Discours sur les sciences et les arts*、そしてその翌年に刊行を開始した『百科全書』の副題 *Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* である。ついでに言えば、周知のように、ルソーの論文は、ディジョンのアカデミーの提示した問題「学問と技芸の復興 (le rétablissement des sciences et des arts) は、習俗の純化に寄与したか否か」に対する回答である。人間の理論的・実践的知識の秩序と連鎖を示すことによって、人間社会の進歩と発展に寄与することを目指す『百科全書』と、知識と技術の進歩が人間の道徳的退廃を招くことを強調するルソーの立場は対極にあるが、取りあえず *métiers* は脇に置けば、双方とも *les sciences et les arts* の総体を考察の対象にしている。そしてルソーの問題意識が、現代の用語法で言えば、文化と文明は人間とその共同体にとっていかなる意味を持つか、に関わっていたとすれば、*les sciences et les arts* は、文明あるいは文化と言い換えられるのではないか。しかし逆に言えば、*civilisation* という語を欠いていた18世紀半ば以前には、人間の理論的・実践的活動の総体をカテゴリー化し、その道徳的価値及び政治的価値を考えることが困難だったのではないかという予想も成り立つ。

それと関連して考えたいのは、*les sciences et les arts* の内実である。ルソーの第一論文は、伝統的に『学問芸術論』と訳されてきた。しかし、*sciences*—これも解釈上の困難を抱えている—はさておき、*arts* は芸術なのだろうか。それが、音楽、絵画、彫刻、建築のように、現代的な意味での芸術のうちに数えられるものを含んでいるのは確かである。だが少なくとも、17世紀の観点からすれば、*arts* は、人間の精神活動のみならず肉体活動の広大な部分を覆う言葉である。それは、規則に従って作品あるいは仕事を見事に仕上げる方法と定義され、さまざまな分類がなされるが、代表的なのは、*arts libéraux* (自由人の学芸) と *arts mécaniques* (機械的な技芸) の区分である。前者は、中世伝来の自由七学科の意味が忘れられたわけではないが、それ以上に、貴族・紳士にふさわしい学芸とされた「詩、音楽、絵画、戦術、建築、航海術」を指していた。(前三者と後三者の並置は奇妙に思われるかもしれないが、伝統的な貴族の活動の場が、宮廷と戦場であったことを思えば、その理由は推察できる。) 後者は、主として職人が携わる手仕事、たとえば「時計製作、旋盤、大工、精練、製パン、製靴」等の業種と技術を意味する。そして両者は、実践(作品や仕事)に関わるかぎりにおいて、証明を原理とする *science* に対立する。とはいえ、*science* と *art* の区別は必ずしも明確ではない。理論的な学問の代表に見える論理学でさえ、それが *science* と *art* のいずれに属するかは、スコラ哲学者の間で係争事項だった。論理学の別称が、*art de penser* なのは、おそらくこのことと無縁ではない。さらに、学校用語としては、自由七学科の伝統を引き継いで、古典語の学習を基礎とする人文学と哲学、要するに大学前期課程までに教授される基礎教育科目の総体も *arts* と呼ばれた。BA, MAがその名残であるのは、言うまでもない。

こうして *arts* は、人間の能力を方法的に使用するすべての活動に適用されるが、そこ

には、現代から見れば、異様な意味の欠落が認められる。「芸術」が、抜け落ちているのである。17世紀、そしておそらく18世紀中葉までは、単数定冠詞を伴い単独で使用される l'art は、人為、技巧、技能を意味することはあっても、芸術を意味することはなかった。なるほど、beaux-arts という表現はあり、今日の多くの芸術ジャンル（音楽、詩、絵画、彫刻、ダンス）を包括的に指示していたが、それが近代的な芸術概念と重なり合うかどうか疑わしい。その点で、beaux-arts を「唯一の原理」に還元することを目指したシャルル・バトゥーが、雄弁（現代風に言えば、散文芸術）と建築を、それらが美的快感のみならず有用性を目指すという理由で、beaux-arts から除外しているのは示唆的である。私などは、ここに、「芸術」というカテゴリーの誕生を準備する悪戦苦闘の跡を読みとりたくなるのだが、いかがなものだろうか。

似たような事情は、littérature の語義の変遷、そしてそれが、belles-lettres と取り結ぶ関係にも見られる。ラテン語の litterae（文字、書物）に由来する littérature は、ラテン語にまで遡る由緒ある語であるが、元来は、「文字で書き記されたもの（lettres）についての深い学識、知識」を意味しており、近代的な「文学」の意味を獲得するのは、18世紀後半以降であると言われる。逆に言えば、今日「文学」の名で呼ばれる文筆活動を人間の知的活動の一領域として包括的に示すタームが、それ以前に存在したかどうか疑わしいということである。たしかに、beaux-arts に呼応する belles-lettres が、美に関わるあるいは美的効果を目指す文筆活動として文学に近似する領域を指示していたことは否定できない。だが、その内実は、詩と雄弁であり、それに歴史が加わることがある。先ほどの、バトゥーの beaux-arts の定義と、微妙な交錯が生じていることに気付かれるだろう。しかも雄弁は、「散文芸術」とパラフレーズしたが、そのモデルは、建前としては、デモステネスやキケロの政治弁論と法廷弁論、ボッシュエの説教や追悼演説であり、今日の文学の代表的ジャンルである小説をそこに含めるのには、大きな困難がある。Belles-lettres も近代的な文学概念とはほど遠いと、言わざるを得ない。ところがここでも、バトゥーは、一つの徴候である。彼は、1747-1748年に、*Cours de Belles-Lettres distribués par exercices* と題する書物を刊行するが、それを改訂した新版(1753)は、*Cours de Belles-Lettres, ou Principes de la Littérature* と題されているという。調べたわけではないが、belles-lettres と littérature が、明示的に等式で結ばれた、かなり初期の例ではあるまいか。もちろん、だからといって、belles-lettres が、近代的な文学の概念に変貌したということではあるまい。しかしながら、このような用語法こそが、たとえばスタール夫人の『文学論』*De la littérature* (1800) の出現を可能にする、知の地殻変化の前触れであったと考えることは許されるのではないか。

実は、この文章を書き始めるときには、心的活動とその所産を指示すると考えられる二つの単語、sentiment と imagination を取り上げるつもりだった。しかしこれらは、はるかに複雑で入り組んだ事情を抱えている。別の機会に譲りたい。ただ強調しておきたいのは、基本語彙の意味の変遷は、たんなる語義の変化ではなく、われわれが世界と自己と他者に注ぐ眼差しの態勢そして体制の組み替えの原因でもあれば結果でもあるということである。言葉から出発する歴史研究は、否応なしにノミナリスム的なアプローチ（方法論的ノミナリスム？）を採用せざるを得ない。そこでは、「文明」や「文化」であろうと、「文学」や「芸術」であろうと、さらには「感情」や「想像力」であろうと、実在と見なされる概念を探求の出発点に据えることができない。与えられているのは、古人が書き残したテキスト、そこに記されている言葉と表現である。そのような関心を持つものにとって、18世紀のフランスとヨーロッパは、17世紀との対比で、とりわけ豊穡な研究対象を提供してくれるように見える。このような観点から、17世紀研究と18世紀研究の接触と交流が、以前にもまして拡大・深化することを念願している。

事務局より

ジェノヴァ若手セミナーについて

2005年10月24～30日にかけて、ジェノヴァで若手セミナーが開催されます。詳細につきましてはホームページをご覧になるか、事務局にお問い合わせください。締め切りは4月30日です。

名簿について

2005年2月に新しい名簿が発行されました。間違いがありましたら事務局の方にご連絡ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

現幹事会メンバー：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事・年報担当)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉(常任幹事)、佐々木健一(代表幹事)、高橋博巳、寺田元一(国際幹事)、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)

会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第47号 2004年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

fax: 03-5841-8958